「週刊読書人」 2014. 3/7 (金)

ジャン＝ピエール・デュピュイ著

聖なるものの刻印

科学的合理性はなぜ盲目なのか

超越性の忘却がもたらす破滅の道

繊細、かつ複雑な科学技術批判

金森　修

デュピュイはエンジニアとしての素養を背景に、認知科学の成熟や人文科学のモデル化に長く関わり、同時にそれらの意味をメタ的に省察する認識論の学者としての経歴も積んできた。フランスでは有力な科学哲学者の一人と見なされているが、この場合の〈科学哲学〉は、英米系のそれとは多少とも性質を異にするものなので注意が必要である。何冊か邦訳もあるが、その中では特に『犠牲と羨望』が独自の切り口をもつ政治哲学を実現している。

さて、この本である。全体としては議論がやや拡散気味だが、にもかかわらず本書には重要な思索がいくつもちりばめられている。ここではその中から二つの論点を取り上げておく。

まずは、デュピュイの繊細、かつ複雑な科学技術批判である。彼はもともと科学技術の基礎的訓練を受けている人なので、批判とはいっても、純粋に外在的で外来的な批判ではない。ただ、ニュアンスに富むとはいえ、主張の最終的な方向性はかなりはっきりしている。まずはいわゆる人文学者に向けた提言。つまり、現代社会の中で科学技術に無関心または無知なままに留まるのは許されないということだ。人文学者があれほど重視する一般教養には、現代の科学技術文化についてのそれなりの通覧が含まれていなければならない。教養人は〈無知〉であってはならない。他方で、自然科学者やエンジニアはどうか。領域内部での激しい競争で余裕を失い、自らの学問についてさえ、その歴史や来歴を無視し、先端的知見の習得に集中するという知識様式をもつために、彼らはいかなる意味でも、反省的契機を内在化しない。本当なら公益のためという最終目的があるはずであり、公益実現の評定のためには幅広い知識をもたねばならないはずなのに、それを知ろうとしない。また、意味や価値についての問いかけには関心を示さない。そんな作業は哲学者や科学史家に任せておけばいい、とでもいうかのように。こうして、いささか逆説的ながら、現代の科学技術は文化的活動とは言い難いものになっている。だが、それでいいはずはない。本来、科学技術者は〈無教養〉であってはならないのだ。

だから、無知な教養人と無教養な科学技術者という状態を脱し、科学技術の概略的動向に習熟した教養人、歴史や文化、価値や審美性などへの感性も備えた科学技術者が生きる社会を目指さねばならない。それが理想的社会というものだろう。

しかし、より現実に密着した位相に眼差しを設定し直す時、実際の風景はどのようにみえてくるのだろうか。デュピュイの見立ては楽観的とはいえない。特に現代の科学技術の場合、その理想実現のための方策や条件が整っているというよりは、知識様式自体の特性に基づき、視野狭窄がほぼ当然視されるという事情がある。またそれが産業と絡み合っているために、それまで行われてきた知識様式を脱却するインセンティヴが働かない。なぜならそれによって、少なくとも同時代的な産業の活性化と生活の活発化がもたらされるからだ。実際にはその背後にある事実、つまり激しいエネルギー消費や環境劣化などは、問題視されず、前景化されない。それどころか不幸の予言者は笑いものにされ、批判者は無視される。反省と留保、文化的定位などという、本来必須であるはずの要件は先延ばしにされるか、無視されるだけだ。科学技術批判は非科学的な蒙昧主義と端的に同一視されてしまう。こうして、科学技術は、批判者の〈哀歌〉の響きをうるさく聞き流しながら、「世界終末時計」を進める方向にしか向かおうとしない。「真夜中」という破滅に向かってである。

デュピュイは、現代から近未来にかけての科学技術を象徴するものとして、いわゆるNBICをあげる。ナノ、バイオ、情報テクノロジーと、認知科学である。しかもそれらはいわゆる「収斂」を起こし、人間観や生命観の変化に多大の影響を与えつつある。確かに、人間観や生命観が変化するということ自体を、即、嘆かわしいということはできない。しかしそこに作動する多少とも自然主義的な発想は、或る重要な見落とし、重要な誤認を行っている。

そこで、デュピュイの二つ目の論点が浮上してくる。それを彼は、象徴系などという言葉でも言い直しているが、中核的な規定は〈聖なるもの〉という表現によって表されている。そうなのだ、自然主義は、人間が存在し、活動する際に必ず必要とする、超越的な成分をむりやり活動位相と同一平面に引きずり下ろし、そこで理屈をこねることによって、〈超越の超越性〉を台無しにしてしまう。進化学者ドーキンスの無惨な宗教批判（『神は妄想である』）を考えてみればいい。その種の作業から見えてくるのは、現代人が知性的で科学的だということよりは、現代人が人類の文化史を大上段から愚弄しても別に構わないと思えるほどに夜郎自大化しているということなのである。われわれがすべきなのは、むしろ、文化の重要な局面に〈聖なるものの刻印〉を感じ取るだけの感受性と教養を蓄え続けることなのだ。――自然主義の自惚れにうんざりし、文明史的な流れの中に現代社会を定位しようと思う人にとって、本書は重要な後押しをしてくれるはずである。（西谷修・森元庸介・渡名喜庸哲訳）（東京大学教授・哲学専攻）

★ジャン＝ピエール・デュピュイは哲学者・スタンフォード大学教授。エコール・ポリテクニーク名誉教授。一九四一年生。

聖なるものの刻印
科学的合理性はなぜ盲目なのか
ジャン＝ピエール・デュピュイ
未来のない効率信仰よりも、
カタストロフィへの目覚めを！
以文社

四六判・343頁・3360円
以文社
978-4-7531-0318-8